
青空。

美空遊衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空。

【Nコード】

N9494L

【作者名】

美空遊衣

【あらすじ】

最初はただの相談相手＋心友。

でも、

好き好き大好き！！

あれ…？

いつの間に好きになっちゃったのかな？

でも劉樹は…。

もう今更遅いよね。

——大好きでした…。

私、

あなたに出会ってなかったら

きっと今の私は無かったと思う。

その前に、

この世に居なかったかも…。

あなたは私にとって、

それくらい大切な人なんだよ？

気づいてた？

知ってた？

私の気持ち…。

あなたが私の隣りから居なくなっ

ただけ悩んだと思う？

悩んで悩んで…。

切なくて切なくて…。

目の前に居るのに話しかけられない。

もう、

自分がどうしたいのかも

分からなくなつて…。

どれだけあなたの存在が大きかったか、

こうなつて初めて気づいたよ。

「私には、あなたが必要」

なんだつて。

でも今更言つたつて

もうあなたは隣りに居ない。

友達にすら戻れない。

いまだに

「あの頃に戻れたらな」

つて、

「素直でいれば良かった」

って思う。

でもね、

もう前を向く事にしたよ。

前向いて、

しっかり生きてくよ。

あの頃の記憶は、

消えないかもしれない。

でも、

もう前向くよ。

明日を生きるよ。

過去を振り返らないよ。

あなたが居なくても、

大丈夫な様になるから。

私はもう、

強く

強く

――、生きていく。

「はぁ……。今日から又学校か。」

学校の屋上で一人
たそがれながら言った。

あたし、神谷^{かみや} 海空^{みいか}。

中学2年生の、13歳。

誕生日は4月1日。

血液型はA。

昔から学校は好きじゃない。

「なんだよお前、また元気無いのかあ？」

と言ったのが、神谷^{かみや} 劉樹^{りゅうき}。

中学入って、苗字が一緒だから

その事から仲良くなった。

今じゃ一番仲の良い友達……、

いや、心友だ。

「だーってさっ！

だるいんだもん。学校。

授業は息苦しいし、

友達はいいい人ばかりだけど、

実際あたし嫌われてるかもしれないしさ……。

そゆの

めんどくさいなって。」

緑色のフェンスの奥の景色を
見ながら言った。

「んーでもさ、

俺はお前の事好きだよ?」

「え・・・?どーゆー意味で?笑」

「は?そりゃもちろん友達としてだろ。」

なんだ・・・。

恋愛系じゃないのか・・・。

「もしかしてお前、恋愛系の方の意味だと思ったの!?!?笑」

「はあ??そんな事ないもん!!」

あんたに好かれてもぜっぜん、嬉しくないしっ!!」

あ、

嘘ついちゃった・・・。

「そーかいそーかい。

んじゃ俺は大人しく消えますよ。」

「消えちゃえ消えちゃえ!!」

「はいはい、さよーなら。」

劉樹は屋上から出て行った。

「あーあ。

又嘘付いちゃった・・・。」

なんで素直になれないんだろ?
もうちょっと

素直になれたら、

人生変わったのかな？

劉樹ももっと、

好きになってくれるかな？

「おーい！！授業始まるから教室戻れー！！」

先生が屋上の入り口から叫んできた。

「はーい！」

もお授業か。

めんどくさいな。

あたしは屋上から出て行った。

「よ！海空」

「岡崎先輩！！どーしたんですか！？」

放課後1人で帰ろうとしてたら

屋上で知り合った屋上仲間の

おかざきゆうま

岡崎遊馬先輩が現れた。

「いやゝ、忘れ物取りに来た帰りでさ！
偶然そこで見かけたから」

「そーだったんですかあ。
にしても、久しぶりですね！」

「そーだなあ！！俺等あと3日くらいで卒業だから
4時間授業しかないしな。」

「そーですね。後3日かあ…。」

「え、何々？

俺等とさよならするのは嫌だって？笑
かわいいーなあ！！海空ちゃんはあ！！」

そう言いながら岡崎は

海空の頭をクシャクシャと撫でた。

「い、いや別にそんな事

言っていないです。」

「はぁー、そーゆー事言わないで
はい寂しいですう。って
言っとけばいいんだよあ。
全く可愛くないなあ。」

「はいはい。あたしはどーせ
可愛くないですよー。
そいじゃ、さよーなら。」

「あー!!ごめんごめん!
かわいーから、かわいーから。
んでさ、今日1人なの?」

「えー、まあ。」

劉樹は生徒会で遅くなるんで

「そつかあ!

じゃ、一緒に帰ろー!」

「あ、いーですよ。」

こうして私達は一緒に帰った。

*

*

* * * * *

卒業式。

「今日で3年居なくなるのかあ。
少し、寂しいなあ？」

劉樹が少し
悲しげな笑顔で言ってきた。

「別にあたしは寂しくないけどねえ。
部活もすぐ辞めたし、委員会も入ってないし。
先輩とあんまり関わりないから。」

「そーゆー事じゃなく…」

「ただ、雰囲気が…。
悲しくなるね。」

「・・・そーだな。」

私達はいつもの屋上で
卒業式が始まるまで
話していた。

「先輩！！ボタンください！！」

卒業式は終了し
校庭で、ほとんどの生徒が屯している。
3年生との最後の思い出作りの時間だ。

「岡崎先輩！！卒業おめでとーございます。」
と、海空。

「おお！！海空あ！サンキュー！！
ついでにボタンは？笑」

「いりません。てゆか
やっぱりここに居たんですね。」

私達は今、屋上に居る。

「えー！！貰つてよお！！」

「一個…無くなってるんですね。」

「え？あ、まーねえ」
さつき校庭から出よーとした時
可愛い2年生が

“ください！！” って
来たんだよ。」

「そーなんですか。
じゃー・・・、ネクタイ、
下さいよ。」

「え…？」

「ダメですか？…」

私はこのとき

何故だか分からないけど
涙が溢れて、涙目になりながら聞いた。

「い、いや全然あげる!!
ほら、あげるから泣かないで?」

と、ネクタイ片手に
私の零れた涙をもう片方の手で
優しく拭いた。

「ご、ごめんなさい。
なんか急に涙が…、
ネクタイ、ありがとーございます。」

「いえいえ。
俺が居なくて寂しくなったら
いつでも電話してくれよ!!
すぐ飛んでくから!笑」

「・・・はい!!」

「えっ!?
今日は素直だね笑」

「え? いけないですか?」

「い、いや? そっちのが嬉しいけど

調子狂うなつて。」

「じゃー、

先輩なんて居なくても
平気ですよ!!」

「んなつ!!」

やっぱ素直で居てくれ!!」

私達は劉樹が生徒会の仕事が終わるまで
ハシヤギあっていた。

「それじゃー、
また今度な!!」

私達は岡崎先輩と
学校から途中まで
一緒に帰ってきた。

今は、その別れ際だ。

「「はい!!」」

「元気でな。」

「岡崎先輩こそ。」

と、劉樹

「おうっ、ありがとな。
それじゃーまたな!!」

岡崎は1人、帰っていった。

「今年の1年、可愛いー子多いらしーぜ!」

「まじで!?!? やった〜! これで少しは希望が!」

「今年の1年は、厄介者ばかりだった!」

「あー！それ聞いた聞いた！！」

今日は入学式。

3年生は全員出席しなければならない。

3年生は今、全員

体育館（式場）に居る。

「りゅーきー！！」

みーいかー！！

おはよー！！」

神原由梨かんはら ゆうりという

私が中1の時から仲良くなった
女子の中で唯一の心友が
やって来た。

「おはよー！！由梨！」

「おうっ！やっと来たか！！」

「ごめんごめん！

ちよつと準備に時間がかつちゃって♪」

「な、なんの準備だよ！

由梨みいたな奴に

誰が引つかかるんだよ？笑」

と、劉樹。

「はあ！？ちゃんと見る目ある人は私の魅力に気付くんですう！！」

「はいはい、くだらない言い合いはそこまで！」

「ほら♪

海空は私の魅力に気付いてる！
ね？」

「あーはいはい、
かわーですねー。」

「ほーらね！みなさいよ劉樹！！」

「ちっ！あーうぜうぜ。

何処がかわいーんだか？

俺はそろそろ

生徒会の召集時間だから
行くわ。」

「あ、うん。頑張つてね！」

「さっさと行つちまいな！！」

「おうつ、ありがとな海空」

また後でな、海空！！」

劉樹は憎み笑いしながら由梨に言つて
去つて行つた。

「ギャー！！！！！！」

ムカつくムカつくう！！」

「あんなもん一々相手にしなきゃいいのよ。」

「でもさー、私は

あーゆー劉樹が居ながらも

優しいところが好きなんだよねえ。」

「そっか。

ラブラブ馬鹿ツプルは

健在か…。」

そう。

劉樹と由梨は

付き合っている、

恋人同士なのだ。

「何よ馬鹿ツプルってえ!!
別に馬鹿ツプルで結構ですよん」

「いやゝ良かった良かった。
自覚有ってくれて!」

「んなつ!!」

まあ、海空なら良しとしましょう。
てゆか

海空好きな人まだ居ないの?」

「え・・・?」

そりゃ劉樹だけど。

なんて言えるか、ボケ。

「い、居る訳ないじゃん!!」

「なんだあ!!つまんなーい!!」

「人の恋愛で遊ぶな!」

「まあまあ。

今年の1年はカッコイーの
多いらしーから頑張つて」

「え?あ、うん。」

「出来たらちゃんと言ってよ？
協力するからさっ」

「うん。ありがとう。」

「ま、海空は案外モテるから
協力するまでもないかな？笑」

「な、なんでよ！」

「ふふふ。そのうち分かるって」

「んぬー・・・」

そーこー話している内に
入学式は始まった。

1年3組。

相田みい子

「はい！」

安部雅史

「はい！」

・・・ん？

「みーいか！！」

「わっ！！！？」

「んもーやつと起きたあ！！！」

「え？あ、由香。ごめん。」

私、

いつの間にか

寝てたんだ。

「それよりそろそろよ！」

1年の中で一番かつこいーって噂の奴!!」

「へー。」

神宮寺裕樹

「はい」

え・・・？

神宮寺・・・裕樹？

もしかして…

ザワザワ

在校生が一斉に騒ぎ出した。

「わーおう!! やっぱ噂通りのイケメン君ね♪
ねえ海空!!」

「え? あ、そーだったね!」

「海空狙っちゃいなよ!!」

「え!？」

「いーよー、無理だし興味無いしい。」

「いーからいーから!!
まずは仲良くなる事からね♪」

「えー!
いいつて言ってるのに…」

「仲良くなってみなきゃ分かんないじゃん!!
どんな人かなんて!」

「そーだけどー・・・」

「よし!! 決まり!
情報いっぱい集めとくから
待っててねえ♪」

「あー!! 由香待ってよ!」

由香はそのまま何処かへ
行ってしまった。

「んもー。由香ったら…。」

私は一人で教室に戻った。

にしても、神宮寺裕樹・・・。

どっかで会った事ある様な気がする。

んで、もっと凄く仲良くて…。

気のせいかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9494/>

青空。

2011年10月6日09時50分発行